

ちによくなくなったわけです。

その後は支那軍から糧秣を受領しての生活となったのですが、武装解除は十月八日でした。復員は昭和二十一年四月でしたが、その間は集中営と呼ばれる収容所での生活でした。支給食糧は段々と少なくなり、私物品を中国人と交換しながら生活を維持していたが、それも品薄となりました。

中国住民の日本軍に対する感情は複雑だったと思いますが、蒋介石総統の布告もあり、概して良かったといえるでしょう。復員は浦賀港上陸して行われたのですが、帰る途中の都市は焼けて廃墟となっている所も多く、「国敗れて山河あり」の詩文を思い出しながら故郷高山の地を踏んだのです。それにしても、同年兵を始め沢山の戦友が、南支の地に骨を埋めていることを今も想い出され、慰霊の心を持ち続けています。

戦争と軍医と衛生兵

神奈川県 永井 収 三

—簡単な軍歴をお聞かせ願えませんか。

朝鮮の大邱医科専門学校を卒業し、京城で教育を受け、昭和十八年八月、独立混成第二十二旅団独立歩兵第六十六大隊に配属になりました。その時の階級は軍医見習士官でした。

—それからずっと大隊と行動を共にしたのですか。

そうです。大隊本部は廣州市の河南にありました。中国における私の軍歴は大きく分けて三期間に分けられます。第一期は廣州市駐留の時期、第二期は湘桂作戦の時期、第三期は抑留時代です。

—廣東時代の思い出を一つどうぞ。

私は植民地の学校出なので、内地から直行した将校より中国に違和感を感じませんでした。それに本部勤

務でしょう。兵科の將校と異なり部下を持たないので直接の責任というものは無いのも同然です。

当時、日本軍はまだまだ余裕があり、特に廣州市には香港で押収した高級ウイスキーやウエストミンスタール、キャメル等の高級煙草が溢れ、借行社で洋服生地も手に入りました。

大隊本部と珠江を隔てて歓楽街があり先輩の軍医によく連れて行って貰いました。

— 嫌なことはありませんでしたか。

廣州市内を歩いて行く日本兵が洋車にふんぞりかえり、降りると軍票を払わずに逃げ出したり、二〇錢を一〇錢に値切るため脅かしつづける姿を見受けたことです。朝鮮にもこんなことはありませんでした。

それに初年兵の性教育、具体的にはコンドームの使用法に立ち会うことです。説明は人事係の准尉でした。朝鮮の学校の出身者だと慰安婦に直ぐ分かるのでしようか。巡察や定期検査の折りなどよく相談を持ち込まれました。奴隷狩同様に連れてこられたとか、いつ帰れるのか、こんな体では故郷に帰れないとか。見習

軍医では答えるすべもありません。黙って聞いているだけでした。ふとアレキサンダーやジンギス汗の軍隊では若者の性処理をどうしたのか、考えこんでしまうこともありました。

かれこれ半年経ち、大隊をあげて江門へ移動することになりました。

警備地区の変更か、作戦のための集結なのかその時は分かりませんでした。大陸掉尾の湘桂作戦のための集結と判明したのは間もなくのことでした。廣州の生活と天国と地獄の相連の世界が展開したのです。

— それでは湘桂作戦についてお話し下さい。

軍医ですから第一線に出撃して戦うことはありませんでした。それでも、今も夜中にうなされることがあります。学校出たての軍医見習士官が数百人の兵の生命を預かるのかと思うと空恐ろしいことでした。軍医は常に本部勤務であり大局から判断ができ、兵科將校と異なり命令という指揮系統の埒外にあったことは幸せでした。

昭和十九年の六月江門を威風堂々出陣しましたが、

その時一年二ヵ月後の無条件降伏など夢想もしませんでした。

全作戦を通じて、将校も下士官も兵の区分はなく、体力がある者が、最後に残るということを、嫌という程知らされました。江門から全県まで行軍、戦闘、駐留の繰り返しで、終戦を五体満足に迎えた者は出陣の時の三分の一以下でした。

本部から見ていて最も印象的だったのは山元少尉と金子中尉の戦死でした。

山元少尉は将校斥候中、敵の部隊と遭遇、頭部貫通銃創を受け戦死、金子中尉は本部付将校であるにも拘らず、第一線の山上からの敵情偵察中、狙撃兵の弾で腹部貫通銃創で即死しました。お二方とも立派な将校でした。

広西省貴州から彼我の勢力は逆転し、制空権は完全に米軍に握られ、正規軍の火力は我に数倍していました。

命令無視というより実行不可能な命令が濫発され、末期的現象があちこちに生じているのが素人眼にも分

かりました。

戦闘が起きると「衛生兵前へ」と前方から声がかかると。到着した時は負傷兵の息が切れかかっている。そんなことの繰り返しでした。

九死に一生を得た思い出をお話しましょう。

部隊長から第四中隊と行動を共にするよう命令され、行軍中、百朋街の谷間で包囲攻撃された時のことです。山頂からの集中射撃で瞬時にして十数人の死者が出た。畔と畔の間に伏したり溝に身を隠した。少しでも動けば山の上から小銃・軽機の乱射です。森田衛生兵の動きは見事の一事です。弾の隙間を縫い負傷兵に手当を、死者から小指を切断していました。

昼間は動かれず、夜になって第四中隊から出した斥候と田賀部隊の将校斥候と連絡がとれ、辛うじて死地を脱しました。

後日、知ったことですが、兵团は大隊を見捨てて一路北上の準備をしていたところで危機一髪のところでした。考えて見れば第二十二旅団そのものが虎の子第十一軍の捨て石だったので。軍隊や組織の非情さを

知らされた一齣でした。

衛生兵は兵科の兵に較べ軽く見られていましたが、いざ戦闘の時は衛生兵程頼りになる者はいないので、

戦線が後方基地から離れば離れるほど物資の特に医薬品の補給が途絶えます。「医療器具を、薬品を」何度叫んだか知れませんが。薬さえあればと、どんなに地団駄踏んだことか。

また、せっかく負傷兵を野戦病院へ運んでも薬品も食糧品も乏しく死ぬのを待つ状況です。戦闘部隊の食糧は現地調達です。現地調達といえれば聞こえがよいが体のよい略奪です。野戦病院では戦闘能力の無い悲しさ、むなしく死を待つだけなのです。

全県で敗戦の紹書を聞いた時は、来るべきものが来たという感じでした。

一軍医でよかったという体験をお聞かせ下さい。

三埠での話を二つ。

十七・八歳の少女の乳腫の切開手術に成功したところ。本の通り、習った通り成功し、思わず快哉を叫び

ました。

あとの一つは梅先生に私の持参した半壊のオリンパスの顕微鏡と破傷風の血清を送ったところ、涙を流し喜んで貰ったことです。梅先生は占領下の孤児院に一人踏みとどまり治療にあたられた先生で、中国にも偉い人がいるなあと頭が下がります。

最後は抑留時代のことですが、治療と薬品で少しは日中親善に役立ったつもりです。仲のよい将校と、たまには衛生兵と部落から部落へと巡回しましたが、医に国境なしと心から思いました。お札に貰うお米や饅頭で少しは本部の食糧不足に役立ったつもりです。

また半死半生の山崎中尉を森田衛生兵と苦勞して集めたMチンで助けたのも軍医ならではのやささか得意でした。今でも慰霊祭や戦友会で会い懐旧談に華を咲かせています。

私が無事復員できたのも本部下士官の北林、曾山、関、中隊付きでは菅沼、鈴木、高橋、森田の衛生兵の方々のお陰と感謝しております。

復員したら医術で日本の復興に少しでも役立ちたい

と帰国の日を指折り数えて待つておりました。

今、静かに考えると全く勝ち目の無い戦争で、愚かだったの一言に尽きます。戦争は二度と繰り返してはならないと固く心に誓いました。

―貴重な体験談有難うございました。

潜 行

神奈川原 畔 柳 英 男

―簡単な軍歴をお聞かせ下さい。

昭和十七年八月に東京赤坂の歩兵第一〇一連隊に召集入隊し、直ちに広東の貨物廠に移動になりました。

昭和十七年八月独立歩兵第六十六大隊に転属、保定の幹候隊で教育を受け見習士官に任官、第二中隊の小隊長に任命されました。

―それから湘桂作戦に参加されたのですね。

いや半年近く、広東市内の警備と初年兵の教育でした。湘桂作戦中に甲部隊が編成されました。

―甲部隊と言いますと。

簡単に言いますと、特務機関・便衣隊・将校斥候を併せたようなもので、敵深く挺進潜入し、情報の収集、小部隊の撃破、不穩部落の掃討、流言飛語の流布、後方攪乱、軍事施設の破壊等を任務としています。

昭和十九年六月、広東で節兵団隷下部隊から将校一名、下士官六名、兵三十六名、通訳一名、特別工作員（華人）六名で六班編成されました。

甲部隊の目的は、第十一軍の主力の第二次湘桂作戦に呼応して行動を起こした南支派遣第二十三軍の攻略目標である桂林や柳州の進攻を容易にするため、急遽節兵団をして西江沿岸の要点梧州を攻略させんとしたのですが、甲部隊はその作戦遂行の第一線に立ったのであります。

甲部隊は常時便衣を着用し、状況に応じ敵の軍服を併用。作戦の間、負傷または病気のため行動不能に陥った場合は自決という厳しいものでした。また甲部隊に属している間は無籍者ということで、また命令系統も軍直轄で、岡田芳政参謀の指揮下に入りました。